

感想文コンクールに応募してくださったみなさんへ

ニューヨーク州ウッドストックの森から、こんにちは。

感想文コンクールに作品を送ってくださったみなさん、ありがとうございました。

毎年、思っていることですが、今年も力作が揃っていて、私自身、問題意識を持って読み、読んだあとは自分の胸に手を当てて、反省したり、考え直したり、納得したり、さらに思いを巡らせたりして、たいへん有意義な時間を過ごすことができました。

また、これも毎年、頭を悩ませることなのですが、みなさんの作品に、まるでテストの採点をするようにして優劣を付けたり、どれが最優秀作なのか、一作を選び出したりするのは至難のわざで、言ってしまうえば、全員に最優秀賞を差し上げたいような気持ちでいっぱいです。

まずこのことをお伝えしておきます。

その前提で、最優秀作だと私が思った二作と、入選作一作について、短い感想を書いております。

私の感想とは、あくまでも、私が「感」じたことと「想」ったこと。

そのつもりで、読んでくださいね。

小川佳穂さんの「のこさず食べよう」——本を読んだあと、学校で食べている給食について、小川さんの感じたことと想ったことが、とても素直な言葉で、優しく、そして、易しく語られています。きっと小川さんの性格や、人を見る目、物を見る目、世界を見る目はとても素直で優しいのだろうなと思いました。素直で優しい小川さんの書いた文章は、素直で優しい。私は小川さんの素直さと優しさがとても好きです。

恩田彩蓮さんの『「平和」と「自然」と「芸術」』——恩田さんは私が書いた『ぼくたちの緑の星』を読んで、感想文を書いてくれました。大声で「ありがとう！」を贈ります。自分の書いた本を読んでくれたから、恩田さんに最優秀賞を、と思ったわけではないのですが（本当はそれもちよつとはあるかも？）私が感心したのは、恩田さんは、作者の私以上に、この作品を深く読み込んでくれているところです。私がこの作品にこめた想い

以上の、もっと大きなものを恩田さんは発見し、私に教えてくれたのです。これはやはり、最優秀作に値するのではないかと思いました。

竹下有希さんの「はじめてのエシカル」——以下、最後の段落に書かれている文章の要約になりますが「身近にある物の裏側では誰かが苦しんでいる。その問題を解決するためには、私たち一人一人が「エシカル」という活動を知ること。そして、行うことが大切だと思った」という、竹下さんの学んだことと、思ったことに、私は拍手を贈りたいと思います。バンングラデシユの工場で働いていた女性たちに、思いを馳せることのできた竹下さんは、とっっても素敵な女性です。

「身近にある物の裏側では誰かが苦しんでいる」——これは、環境問題に取り組んでいく上で、本当に大切な、基本中の基本の考え方ではないかと、私はみなさんの感想文を読んで再認識しました。

いえ、環境問題に限らず、世界が抱えているすべての問題、と云うべきでしょうか。差別や偏見をなくすためにも、階級や貧富の差をなくすためにも、これは必要不可欠な思想ですよ。

今回は『苦海浄土——わが水俣病』（石牟礼道子著）を読んだ高校生の作品が多数、寄せられていましたが（以下、くり返しになりますが）どの作品も素晴らしくて、私は唸りました。応募してくださった高校生全員に、最優秀賞をあげたかった。

水俣病に苦しんでいる人たちの裏側には、水銀を垂れ流した企業のおかげで生計を立ててきた人たちもいれば、苦しんでいる人たちを見捨て、排斥し、差別し続けてきた人たちもいた——この、逆の意味での「裏側からの視点」もまた、環境問題を考える上で、目を逸らしてはならない重要な見方ではないかと思いました。

それではみなさん、また来年、会いましょう！

次に感想文を書くときには、私への手紙として書いてくださいませんか。

小手鞠るい